▼清原道壽先生を偲ぶ

現場の教師から学んだ先生

愛知大学短期大学部教授
佐々木　享

1958年に、職業・家庭科に代わり技術・家庭科が誕生した。翌年の11月に開催された都教連の教育研究集会の生産技術教育分科会に参加したわたくしは、その報告と討論には、技術・職業教育に積極的に取り組むべきだとする重要な意見が含まれていたように思われた。都立大学の学生仲間の池上正道さんに雑誌『技術教育』に発表するよう勧められ、暮れ近くに、清原道壽先生に初めてお目にかかった。現場教師を大事にするというのが先生の第一印象だった。

二度目にお目にかかったのは1960年1月に開催された日教組と日高教の合同教育研究全国集会のおりであった。生産技術教育分科会の講師として参加しておられた清原先生は、授業中の災害が話題となった際に、この年の3月から施行される予定の日本学校安全会法成立の背景やその制度の積極面と残された課題を懇切に説明された。視野の広い研究者という強い印象が残った。

ところで何年か後に、ある時期まで清原先生がほとんど独力で雑誌『技術教育』の地味な編集実務に献身され、そのおかげで、決して陽が当たっているとは言えない教科を専門的に扱うこの雑誌が刊行され続けてきたことを知った。これはなかなかできないことである。先生はその苦労を書いたことも口にしたこともなかったように思う。それは、尊敬に価するという月並みなことばでは尽くせない驚嘆すべきことだった。

わたくしは1956年から目黒区立第六中学校で教師生活を始めた。さまざまな民間教育研究運動に参加している教師がいて、職場は活気に満ちていた。かなり後になって、清原先生がこの中学校の創立直後に勤務され、その少し後に同じ職場に勤務された鈴木寿雄氏は清原先生の影響で技術教育研究の道を歩み始めたことを知った。わたくしはほんの数年後に同じ職場で働いたわけである。光栄な奇縁というほかない。戦前、弾圧に屈せず志操を貫き通したこと、88歳にして大冊『昭和技術教育史』を著したことなど、先生の生き方は常人のよくなし得るところではないが、少しでもこの奇縁にあやかりたいものと思う。